

「自分らしい生活が見出せた」一事例からの報告 —認知のある利用者が自分の居場所を見つけた—

春日居宅介護支援事業所
有馬郷美、佐藤信子

【はじめに】

介護サービスの受け入れが困難なケースに対して、地域包括支援センター(以下：地域包括と称す)からの指導の下、ご本人の生きがいを見出すことができた一事例を報告する。

【症例紹介】

男性 81歳 要介護2

既往歴：10年前からアルツハイマー型認知症

アリセプト服用(HDS - R 6点)

主治医からグループホーム入所を勧められている。

症状：短期記憶障害、記名力低下、見当識障害、徘徊、昼夜逆転(警察に保護されたこと3回)
日中は何もせず座っ状態でうとうと過ごしている。

A D L：自分ではできるがふらつきあり見守り必要

生活歴：商家の長男、小学校の校長まで勤める。定年後は市の委託業務を70歳まで行なう。

29歳で結婚し4人の子供は大学まで教育、それぞれ独立している。

家族構成：妻(72)と2人暮らし。敷地内に長男家族在住

介護者：糖尿病合併症にて左眼不自由だが生活に支障ない。

(妻) 婦人会会長、習事など活動活発。

「週の1日でもいいから自分の時間を持ちたい」

「グループホーム以外のサービスは考えていない」と発し、介護負担がうかがえる。

【結果】

地域包括の指導の下、デイケアの見学をし、「講演に行く」「趣味を活かす」という視点でサービスを利用してみたらどうかと家族、本人に提案。利用に当たりデイケアと連携し生活歴から教育者・指導者ということを利用し「世事に対しての意見交換会」「集団リハビリテーションのリーダー」というケアプログラムを設定した。週1回利用でケアプランを作成し利用につながった。

妻から「通所リハビリに行ってくれてよかった。」「しばらくしなかった化粧をした。デイケアにしている間は出かける機会ができ、嬉しい。」と笑顔で話された。本人は今でも徘徊はあるが表情は明らかに柔らかくなってきている。家族が希望するグループホームは現在空きが無く待機状態である。